

はくさんさん

明けまして

おめでとうございます

自分なりの尺度

昨年末のワールドカップでは元気を沢山もらった。トップアスリートの極限とも言えるゴール、監督・ベンチを含め一丸となって戦うチーム、胸がジンジン。

森保監督は以前サンフレッチェ広島を率いて3度Jリーグ優勝を果たし、その時活躍した森崎浩司選手の話がワールドカップ数週間前の新聞にあった。

森崎さんは完璧主義で、練習を重ねてもまだ足りないとい自分を追いつみ過ぎてしま

第124号令和5年正月号

伊豆市 法住寺 発行



仲芝の三門

ったり、睡眠は8時間とらねばと自分を縛ってしまったりして体調を崩すことがあった。ある時、森保監督に「いつもしんどいんです」と伝えたら「しんどいと思っっている自分も好きになってみたら」とポロツと言ってくれた。

『そんな自分が好き』と発することで少しずつ気持ちが楽になっていったという。



水泳の萩野公介さんもスランプに苦しんだ。高校生だったロンドン五輪で銅メダル、リオ五輪では金メダル、数々のメダルに輝き東京五輪での活躍が期待されたが予選落ちだった。そして現役を引退した萩野さんが自分について新聞で語っていた。

何時も自分の内側

に気持ちに向いていて外にむかない。「何でそうなんだろう」とすぐ考え込み、満足することはなかった



が、だんだん自分らしさに気付いていく。

『自分の軸を外に置く人が多いと思う。SNSのフォロワーの数とか、お金をいくら持っているとか。それって他人の評価によって自分が生きているみたいなことだと思う。でも、幸せの尺度は人それぞれで、自分の尺度を見つけて大切にしておくことが、人が生きていく意味だと僕は思う』



極度に研ぎ澄まされた緊張を経験し乗り越えていくトップアスリート、今回のワールドカップでも若い選手たちが苦しみ悔し涙を流しながき、そして自分の道を歩み始めることと想う。

私たちはトップアスリートのような人生ではないにしても、私の歩みは自分自身のものであり、他の誰のものでもない。苦しい時は苦しい、辛い時は辛い。他人がそんな小さなことと思おうが、私にとっては極限のよくな苦しみなのだ。そしてこれが現実であり、これが私だ。そんな自分も好きになってみたら、そうすれば自分の尺度が見えてくるように思う。新しい年を迎えたのだから。

「寿量の祈り 敬意と感謝」

大自然

ありがとうございます。

合掌

社会の皆さん

ありがとうございます。

合掌

ご先祖さま、家族の皆さん

ありがとうございます。

合掌

ありがとうございます。

合掌

合掌

謹賀新年



法住寺護持会

〔総代、護持会長〕伊東一衛

〔総代、副会長〕土屋正次

〔総代〕山田邦光

〔顧問〕山下一、伊東修

〔世話人〕山田邦光、森野智喜

山下武志、加藤正喜、

山下克俊、山崎正行、

伊東和也、伊東謙三、

室野泉、

小塚健治、小塚秀夫

〔監査〕

中伊豆立正大題目講(当山)

〔会長〕山下要

〔顧問〕山下一

〔世話人〕伊東貞子、三田五月、

伊東はつ江、伊東ちよ子、

伊東通子、伊東ミナヨ、三田信子、

山下敏子、渡辺直子、小塚正司、

小塚康清、山下英子、小塚千恵子、

小塚みよ子、杉山松子

伊豆連合大題目講(当山)

〔理事〕山下要

顔晴れる

今年は一とつ良い言葉を得ることができた。

ある時、洋明上人が皆さまに

「頑張る」とは「顔晴れる」と言

うことだと話していた。おどろい

たことにその日から私の中で「頑

張れる」とは「顔晴れる」とスイ

ツチが変わった。人間だもの、疲れたり何と

なく不安になったり、心配ごとだってある。

そんな時こそ少し笑ってみようと。

数年前、法事でみえた方がふつともらさ

れた。「どう生きたらいいのか。生き方が解

らない」と。その時の私は何も答えられなか

った。ずっとそのことを、その答えを私は探

していた。それから数年後、今、私は自分な

りに答えを見つけた様な気がする。それは

与えられた中で「只 生きていく」というこ

とだ。何の爲にとかではなくて「只 ひたむ

きに自分を生きてみる」誰かと比べること

もないと。

先日久々に「生き方が解らない」とつぶや

いた人を見かけた。私は遠くから手を振っ

た。もちろん笑顔で。その方も笑顔を返して

くれた。「生き方」についての言葉はなかつ

たけど。それで良かった。それから会う度に

一歩近づけた様な親しみを感じている。い

つかこの話をしながら語り合いたいと思う。

「只 生きていくことがすばらしいよね」

と。

七面山登詣(投稿いただきました)

「お山の上は魂のふるさと、

新たな気づきの体験」

松本由紀

11月法住寺恒例、七面山登詣に参加しま

した。1泊2日修行の登山です。参加者は

18名、何度も参加しているベテランさんか

ら始めて登る方、今年大切な方を亡くされ

た方、亡きご家族の願いをかなえる為に登

る方、皆と一緒にご来光を拝みたい方など

それぞれの思いを持って参加されます。私

も今回3回目の参加でこれまでとは違う体

験を通して教えを得ることができました。



Kさんは今年亡くなったご主人の七面

山に登りたいという思いを叶える為に息子

のMさんと一緒に初めて参加されました。

74歳で初めての登山、息子さんに選んでもらった登山靴とストックを身に付けて静かに、少し照れくさそうな感じで見ました。

頂上の五十丁目を目指し登り始めて二丁目は最初の休憩場所です。Kさん親子は他の方から少し遅れて到着しました。洋明上人は「自分のペースでいいんですよ」と繰り返して下さるのでKさんも安心されたのではないかと思います。

休憩後自然な流れで私はKさんの前を歩き始めました。小柄なKさんの歩幅をみながら段差と傾斜の少ない場所を選び一步一步進みます。Kさんの後ろに息子のMさん、最後尾には大きな団扇太鼓とお題目で洋明上人が力強く後押しをしてくれます。息子のMさんはこまめに声をかけ荷物を持ちKさんが転ばないよう足元を見守ります。ゆっくりと2丁目毎に小さな休憩を入れながら進みます。

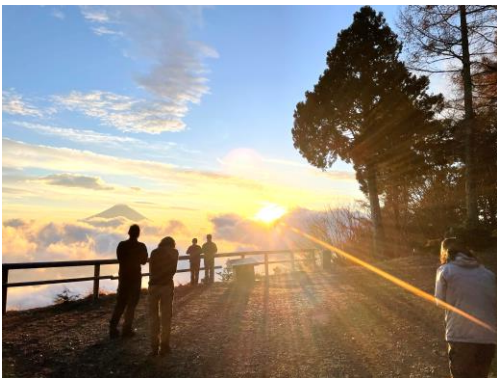
しかし自分のペースでと言いつつ日暮れが近づき気温も下がりはじめます。励ましながらも無理はさせられない、このペースで大丈夫か、私の心の中にも葛藤が生まれます。

Kさんは苦しくて辛い状況でも下山するとは一度も言わず歩を進めます。ご主人の願いを叶えさせてあげたい強い思いに支えられていることがわかります。他のメンバーとメールで連絡を取りつつ7時間かけてついに頂上の敬慎院に到着。



翌朝はご来光も拝みKさんはご主人の思いを成就されました。「良かったね」、「頑張りましたね」仲間が声をかけます。皆嬉しかった、笑顔です、絆が生まれていました。お山の上は魂のふるさと、ここに来ると見えない繋がりを感じます。

Kさんは「迷惑かけてしまった」と何度も言いました。一人ではできない事を教えてくれました。これまでは自分のペースで登り、自分の願いの為に



七面山「来光
あしがつひにぞこまます

祈り、人に迷惑をかけないようにする登詣でした。今回このような気づきの体験をさせてくださったKさんに、洋明上人に、日蓮聖人に感謝いたします。ありがとうございました。



法住寺では「七面山にお詣りしたい(隊)」という隊がある。毎年、七面山へ登詣させて頂き、そこでは沢山のドラマを見せてもらう。参加者にはそれぞれの想いや情熱があるのだが、自分だけの想いだけではなく、皆



七面山敬慎院 全員無事到着
良かったよかったニシ「」

の想いを一緒に
なって七面
大明神に届けるのだ。普段は人の事より自分の事を最優先。しかし七面山の中では、前を歩く人、後ろを歩く人、と自分の事より人の

事と思うことが出来る。それが「七面山にお詣りし隊」で味わうことの出来る醍醐味の一つなのである。



三年前のこと、ご夫婦で参加申込をしてくれた方いた。その年は雪で中止になり登詣が出来なかった。そして登詣叶わぬまま去年の夏、その旦那さんが亡くなられた。故人はいつも「お寺さん。お寺さん。オラはお寺が好きだ」と法住寺と様々な行事を応援して下さいました。私も小さなころから大変可愛がって頂いた。なので私には是非ご夫婦を七面山にお連れしたかったとの思いが強く残っていた。そんな中、嬉しいことに今回その奥さんと息子さんが亡き旦那さんの写真を持って「お父さんも一緒に」と参加して下さいました。初めての七面山、奥さんはもともと膝を痛めていたことも相まって不安も沢山あったことだろう。私も最後尾から太鼓

を叩きお題目を唱えながら登るのだが、その奥さんの様子がずっと気になる。しかしその傍らにはいつも息子さんが寄り添っているのだ。しかも息子さん自身の歩幅ではなく、お母さんの歩幅に合わせ、「早く!」などの愚痴を一言も言うのではなく「大丈夫? 頑張ろう!」と優しく声を掛け、手を添えて一緒に登っている。自分より人の事を思うことの出来る七面山というが、私も同じことが出来るだろうか? まして自分の親に? きっと私なら「早く! まったく! だから言ったじゃん!」などと言ってしまうだろう。



日蓮聖人は親をととても大切にされた。いつも親を思い毎日身延山の山頂に登っては千葉の両親の方にむかってお題目を唱えた。そこが今の身延山ロープウェイで上った思親閣だが、その日蓮聖人が何よりも大切にされた法華経には「親と子とは逆転し、子が親となり、親が子となることがある」と説かれていて。その親子の姿はまさに説の通りで大変尊く心を打たれた。そしてもう一つ魂が熱くなったのは「お父さんも一緒に」の想

いである。その親子の想いが伝わってくる。と、私もその一助になりたいと思えて、太鼓も力強くなりお題目の声も大きくなる。それは参加者全員同じだったことだろう。道中では何度か親子の傍に亡きお父さんの姿を感じた。きつと「目には見えなくても何時も傍で見守っているよ。一緒に連れて来てくれてありがとう。満足! 満足!」と笑顔で言ってくれていたことだろう。今回の七面山では、その親子は私の親となり、自分中心の娑婆で当たり前過ぎてうっかりしがちな「人を大切にする、親を大切にする、仏天とご先祖さまが傍にいて下さる」ということを教えてくれたように思うのである。

また、それを経験させてもらえたのは仏天のお陰さまはもちろん、「七面山登詣し隊」の一人ひとりの豊かさがあって、もつといえれば法住寺の檀信徒の皆さんと、古より今に至るまでにこの法住寺を支えて下さってきた皆さんのご先祖さまの豊かさや情熱だと思ふ。その情熱・豊かさ・皆さんのお力を借りして益々この法住寺が輝きますよう、そこに集う皆さんが笑顔沢山でありますよう。昼夜常精進!!

御志納金「十一月〜十二月」

元村 伊東 一衛殿 尊母葬儀砌
川崎市 田中 洋江殿 夫君一周忌砌
清水 森野 浩由殿 尊祖母七回忌砌
長泉町 三田 海人殿 尊父追善供養